

# 津山市史だより

2018.8  
第12号



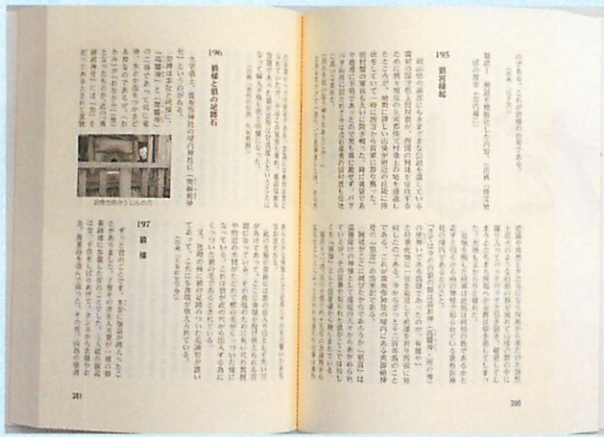
かつての亀ヶ淵周辺 城西通りの高架橋から臨む

江戸時代の初め頃まで、二宮から小田中にかけての吉井川は、現在よりもかなり北寄りを流れていました。元和7年（1621）の洪水によって流れが南へ変わり、今の流路となりました。二宮から東に流れて小田中で吉井川に合流する紫竹川の流路は、かつての吉井川本流の名残りと考えられます。

吉井川が北寄りに流れていた頃には、小田中の字藪の鼻辺りに深い淵があつて、亀ヶ淵と呼ばれていました。この亀ヶ淵には、娘と蛇にまつわる伝説が今に残っています。「作州富川物語」では、恋人とその一族を父親に殺害された悲しみから、この淵に身を投げた亀千代姫が、やがて大蛇に姿を変えて村に災いをもたらすようになります。

この伝説から派生したと思われる民話では、夜な夜なこの淵のほとりに出掛ける亀千代姫の水面に映った姿が大蛇であったという話に変わります。しかし、子授けを高野神社に祈願した長者の娘として生まれたのが亀千代姫だということは、いずれの話にも共通しています。亀ヶ淵にまつわるこれらの物語は、高野神社と吉井川との浅からぬ縁を象徴するものと言えるでしょう。

（小島）



多くの市民のご協力により、760  
話・640ページにもおよぶ民話集  
に仕上がりました。



著者の立石憲利氏

『つやまの民話』表紙

## 新修津山市史別巻 『つやまの民話』 刊行

市史編さん室では、このたび新修津山市史の別巻として『つやまの民話』を刊行しました。執筆者は、市内旧久米町のご出身で民話の大家である立石憲利氏です。平成26年から調査を開始し、市内各所でのべ98人の方からお話をうかがったほか、多くの既刊書からも引用した結果、760もの民話を収録することができました。

本書は、昔話・伝説・村話の3章構成です。第一章の昔話には、「猿神退治」などのむかし語りのほか、「ほととぎす兄弟」などの動物昔話、笑い話なども採録されています。第二章の伝説には、地域にある木や石、淵などにまつわる話が、第三章の村話には、狐に化かされた話などの世間話が収録されています。

それぞれ、津山で生きてきた人々の思いや暮らしを伝える貴重なお話ですが、高度経済成長によるメディアの発展につれて語り継ぐ人が減少し、いずれは忘れ去られる運命にありました。そうした数々の民話を本書に記録することで、後世への伝達が可能となりました。執筆者の立石氏はもちろん、津山語りの会のメンバーや話者の方々のほか、資料や会場の提供・アンケートの記入など、多数の方々のご協力のおかげで本書はでき上がりました。ご協力いただきました皆さまに、改めて厚くお礼申し上げます。

A5版・ソフトカバー・本文640ページで、市内の図書館などでご覧いただけるほか、郷土博物館と市内の書店で1冊税込2,000円で販売しています。(郷土博物館は耐震休館中のため、販売の取扱いは祝日を除く月曜～金曜の午前8時30分～午後5時15分です。)

# 『つやまの民話』 出版記念講演会

6月17日

グリーンヒルズ津山

リージョンセンター



第2部：語りの会メンバーの語り↑  
第1部：立石氏の講演→

『つやまの民話』の出版を記念して、津山語りの会と津山市教育委員会の共催による講演会が開催され、会場はおよそ150人の来場者でいっぱいになりました。

内容は、立石氏の講演と語り、津山語りの会による語りの2部構成で、まず立石氏が民話を語り継ぐ意義や今回の調査の経緯、調査中の出会いについて話された後、「ほととぎす兄弟」と「力持ち槌佐」を語られました。続けて、語りの会から6人が、一話ずつ語りを披露されました。「手の早いおつつあん」や「尻こきの嫁さん」など、いずれの語りもとてもいきいきとして、活字では感じられない民話本来の魅力が堪能できました。

# 立石さん出版250冊&傘寿祝賀会

6月30日

ピュアリティまきび



から160人にもおよぶ招待客が詰めかけ、盛大な祝賀会となりました。

民話調査の苦労話が披露された講演会（写真上）の後、別会場で開催された懇親会（写真左）では、終始切れ目なく祝辞やスピーチ。余興が続ぎ、立石氏の人柄と業績の大きさを改めて実感しました。今後ますますのご活躍をお祈りします。

昭和13年生まれの立石氏は、今年3月に満80歳を迎えられました。しかも、このたびの『つやまの民話』が通算250冊めに当たるということで、関係者有志が発起人となりました。

内容は、立石氏の記念講演会と祝賀懇親会の2部構成で、県内外



# 部会通信

## 自然風土・考古部会

(部会長…河本委員、副部会長…可児委員)

資料編「考古」は、今年度に版下を作成して、来年度に印刷・刊行することになり、5月に編集作業のための打合せを開きました。業務を委託する業者が決まりましたので、その業者と作業スケジュールを確認した後、部会を開催する予定です。

## 古代部会

(部会長…狩野委員、副部会長…今津委員)

4月に部会を開き、引き続き資料編「古代・中世」の刊行に向けて、掲載資料の調整を行っています。

## 中世部会

(部会長…久野委員、副部会長…前原委員)

資料編「古代・中世」刊行に向け、掲載資料を選別しています。8月に部会を開き、選別作業を行いました。

## 近世部会

(部会長…定兼委員、副部会長…在間委員)

3月の部会で、資料編の大まかな章立てと分担を決めました。4月以降、個別の調査を6回実施したほか、資料編の掲載候補資料の筆耕作業を進めています。今後も継続的に資料調査を実施する予定です。

## 近現代部会

(部会長…在間委員、副部会長…香山委員)

4月以降で、個別の調査を11回実施しており、今後も継続していく予定です。現在は執筆者が各自で資料編掲載候補を選定しているところですので。

## 民俗部会

(部会長…前原委員、副部会長…安倉氏)

2ページでも報告のとおり、昨年度末に『つやまの民話』を刊行しました。

また、4月から執筆者に前津山市史編さん室長の尾島治氏を迎えました。

6月の部会では、祭礼調査の報告や、執筆分担、今後の調査方針などを協議しました。今後、執筆者間で調整しながら細目次を検討する予定です。

## 編さん事業の経過 (平成30年4月)

4月14日 第1回古代部会

5月25日 資料編「考古」編集打合せ

6月4日 第1回民俗部会

6月30日 美作学講座第1回

8月1日 事務局全体会議

8月6日 三好基之氏からの聴き取り

(第1回)

8月9日 第1回中世部会

8月18日 美作学講座第2回

8月28日 第1回編さん委員会

○編さん委員として、8月から新たに左の方が加わりますので、ご紹介します。(敬称略)

尾島 治 前津山市史編さん室長

近世・民俗担当

○事務局職員の異動(4月1日付、主幹級以上)

・退職…尾島 治(編さん室長)

・大倉淳一(編さん室主幹)

・転出…小坂田裕造(室長補佐)↓生涯学習部長

・転入…平岡正宏(歴史まちづくり推進室主幹)

↓編さん室主幹

・昇任…仁木康治(編さん室主幹)↓室長

・小島 徹(編さん室主査)↓室長補佐

## 『津山市史研究』第4号の刊行と 各種刊行物のバックナンバーのご案内

■市史編さん室では『津山市史研究』第4号を3月末に刊行しました。

1冊800円で郷土博物館にて販売中です。内容は、下記のとおりです。

### 【第4号】 平成30年3月発行

- ・森川奈津美「津山市における伊勢大神楽」
- ・山下 香織「資料紹介 諸国風俗御問状同書上 山陽道美作国農工商之部」
- ・前原 茂雄「治承・寿永の内乱と美作国一変革期の在地社会」

■なお、『津山市史研究』のバックナンバーは、以下のとおりです。いずれも1冊800円で在庫がありますので、ご希望の方は郷土博物館でお買い求めください。

### 【創刊号】 平成27年3月発行

- ・安倉 清博「『民具』への視点と展望—津山市所有民具の現状と市史への活用—」
- ・森元 辰昭「津山地域の金次郎像・報徳運動の研究（その1）」
- ・東 昇「近世後期津山藩の築をめぐる領主と領民」
- ・森 俊弘「宇喜多直家の新出書状—祝山城をめぐる攻防戦の関連史料—」

### 【第2号】 平成28年3月発行

- ・北村 章「明治十年前後の津山地域史素描—大早魃・民会・国会請願—」
- ・森元 辰昭「津山地域の金次郎像・報徳運動の研究（その2）」
- ・井上 靖子「中山神社御田植祭の基層構造とその変容」
- ・平井 泰明「中山横穴墓」

### 【第3号】 平成29年3月発行

- ・森 俊弘「美作国守護代の歴史的展開」
- ・深見かづみ「津山地区におけるジャージー牛の消長—蒜山地区と比較して—」
- ・尾島 治「津山の城下町における作人の形成と町作」
- ・小島 徹「美作国絵図の描画内容の変遷—正保・元禄・天保国絵図の比較検討—」

■『津山市史だより』のバックナンバーは、第6号を除いて在庫があります。ご希望の方には郷土博物館でお分けします。なお、文字検索が可能なPDFデータを市史編さん室のホームページ上でも公開していますので、こちらでもご利用ください。

公開ページのアドレスはこちら→<https://www.city.tsuyama.lg.jp/life/index2.php?id=3283>

■旧版『津山市史』は第4巻「近世Ⅱ（松平藩時代）」（3,000円）と第7巻「現代Ⅱ（大正・昭和時代）」（2,200円）のみ在庫があり、郷土博物館にて販売しています。また、郷土博物館のホームページでは、旧版『津山市史』全7巻のPDFデータを公開しています。在庫切れで入手困難な巻をそろえられるだけでなく、パソコン上で文字検索が可能なデータですから、冊子を購入済みの方にもお勧めします。容量が大きいいため、ダウンロードに時間がかかりますが、利用価値の高いデータです。

公開ページのアドレスはこちら→<http://www.tsu-haku.jp/untitled54.html>

# 岸本東民「雲路日記」に見る出雲と美作の風習・風俗の相違

小島 徹

## 岸本東民の略歴

岸本東民は、幕末～維新期に活躍した東南条郡押入村（現・津山市押入）の医師です。彼は、文政3年（1820）押入構大庄屋の岸本佳十郎の二男として出生、備前の医師・明石退蔵（希范）や難波抱節に医学を学び、天保15年（1844）郷里で内科医を開業しました。医業のかたわら私塾を開いて後進の指導に尽力し、初山村の医師・仁木永祐や西々条郡香々美中村大庄屋・中島衛らと親しく交流しています。明治5年（1872）3月1日に53歳でこの世を去りました。

## 長州戦争と「雲路日記」

元治元年（1864）の第1次長州戦争では、幕府が西国21藩に出兵を命じ、15万の兵力で長州藩を包囲すると、禁門の変を指揮した家老3人の自刃によって長州藩が恭順の意を示したため、実戦には至らずに終了しました。津山藩

は石州口の二番手とされ、11月5日から3つの部隊を派遣し、安来の近郊に約2か月陣取っています。

津山藩の一番手の軍勢の一員として11月5日に津山を出発した東民は、11日から翌年正月7日まで安来の近郊に滞在し、陣中の病人の治療に従事していますが、藩から従軍を命じられて以来、役目を終えて津山へ帰着するまで、日記を付けていました。それが、本稿で紹介する「雲路日記」（津山洋学資料館蔵）です。

## 日記の内容

この日記は、和紙を袋綴じしたもので、表紙中央の左端に「雲路日記 全」と表題が記され、本文冒頭には「長州征伐往返日記」と、内容に即した題が付けられています。本文は、東民はじめ村医師5名が郡代所に呼び出され、出兵への従軍を命じられた元治元年8月5日の記述から始まりますが、その後3か月は記載が無く、戸川町

の浜屋へ泊まることになった出発前日の11月3日（実際の出発は1日延期）以降は毎日の記録です。この戦争が実戦には至らなかつたためか、宿所近隣の寺院参詣や美保関の見物に出掛けたことまでが記されています。末尾では、平穩無事に撤兵となつたが、後世に伝えるために日々の見聞を記録したとして、食糧の用意の重要性を強調して締めくくっています。

そもそもが出兵への従軍ですから、幕府や藩から発せられた軍令や軍中法度、所属する一番手の行列次第などが長々と記録されるのですが、安来近郊の赤江村に着陣後は、軍事関係の記述は時々もたらされる包囲網の状況や長州藩の対応などに限られ、東民の周辺の出来事が占める割合が大きくなります。着陣後の軍事以外の日記の内容は、医師だから病人に対する治療記録が多いかと言えば、そうでもなく、同僚の村医師や兄の彦左衛門などを訪ねた記録や、陣中

で詠んだ漢詩・俳句のほか、滞在中にしている家の家族やその周辺で見聞きした風俗・風習などを書き付けています。

## 美作との風俗・風習の違い

とりわけ風俗・風習については、滞在時期が冬で年越し行事を目にしたこともあつてか、数多く記されています。美作の農村で生まれ育った東民としては、出雲の農村の習俗が気になるのは当然のことでしょう。特にこの時は、出兵従軍かつ実戦なしという特殊な状況下で、異国に2か月も滞在することになったため、暇を持て余した時に自然と目に映る物事として、出雲の習俗を記録したものと思われれます。

この日記で確認できる習俗の記載をまとめたのが、次ページの一覧表です。着陣の翌日には、もう言葉や服装、家の構造などの美作との違いが気になっていきます。そして正月には、作州では藩の免許

表：「雲路日記」における風俗・風習に関する記載の一覧

月 日	風俗・風習に関する記載事項
11月12日	①美作と出雲で言葉が分り兼ねる ②男女とも足袋・ぱっち・草鞋を用いず、裸足で農作業を行う →砂地で草鞋を履くと足が痛くなる由 ③持高100石以上でなければ8畳間は作れない ④赤江村350軒のうち8畳間がある家(=持高100石以上)はわずか5軒 ⑤無高でも身代の良い者は表2間でも裏に3間の座敷を作る ⑥国の風俗は至って「下作」、風呂は「はしり」の上で焚く ⑦飯鉢を洗わず古い飯の上に新しい飯を取り込み、食事も至って粗末
11月13日	⑧田地全てには植付けせず ⑨麦・小菜は溝を深く畝を高くして植付け、冬の中打をせず、 溝の土を苗の間にすくい上げて草が生えるのを防ぐだけ ⑩農閑期には若い者たちは胡弓の稽古にいそしむ ⑪濁酒を作る慣習あり、小家でも5～6俵は酒にする ⑫正月用には糟を取り清酒にする ⑬酒屋の酒はあまり買わない ⑭酒の燗は燗鍋を用いる
11月14日	⑮夫のいる女性は頭髮に輪を付ける
11月18日	⑯(卯の日)「カンバノ宮」の祭礼、大群衆が参詣
12月1日	⑰乙朔日の風習は変わらないが、作州で餅をつくのに対し、出雲では牡丹餅を作る
12月8日	⑱豆腐を食べる八日待ちという風習は美作と変わらないが、 氏神に年神の輿を入れておき、村中が交代で12月1日から毎夕献ずる
12月13日	⑲正月のしきたりは作州とあまり変わらないが、出雲では床に灯明をあげ、 年神両神へ本膳2膳を供える →作州では、大晦日からでないとな膳は供えない ⑳正月には年始の客にも三つ井くらいで酒を一杯勧める
12月16日	㉑囲い茄子は作州と同じ ㉒乙朔日に茄子漬を食べるが、雲州では嫁には食べさせない
12月21日	㉓雲州の神有月の御忌について
1月1日	㉔正月儀式は作州と格別変わらない ㉕作州では御免なくては門松を立てられないが、雲州ではどの家も門松を立てる ㉖大太鼓や小太鼓多数を車台に乗せて引きながら打つ ㉗日御碕での神鬼除の弓射神事 ㉘大社の金の馬伝承
1月5日	㉙作州とは違って正月14日に年神送りをする
1月6日	㉚「年竹」と称して大竹を左義長の芯として買い求め、大太鼓などで賑やかに往来

がなければ立てられない門松を、雲州ではどの家でも立てていることに始まり、他の日より長めに習俗のことを記しています。記述のパターンとして多いのは、「この行事は作州とあまり変わらないが」と前置きしつつ、細部ではどの部分がどう違うという書き方です。

この日記に記されたのは、あくまで出雲の習俗であり、美作の習俗は自明のこととして詳述されませんが、細部の相違点の記述により、注意深く読み進めれば、美作の習俗もおぼろげながらつかめるように思われます。

江戸時代の美作の習俗は、同時代人の記録がきわめて少ないため研究が困難ですが、年越し行事に關しては、この日記が大きな手掛かりになるものと思われまゝ。そういう民俗学的な視点から見ても、この「雲路日記」は貴重な資料と言えます。



第1回の会場の様子

第1回

6月30日

「津山地区のジャージー牛導入と結末」

深見かつみ氏（民俗編執筆者）

昨年度に引き続き、今年度も「津山市史関連研究から」と題して、4回開催します。

第1回目は、民俗編執筆者の深見かつみ氏を講師にお迎えして、「津山地区のジャージー牛導入と結末」についてお話しいただきました。

昭和20年代、全国的に牛乳の生産量を増やすために牛の導入が進み、ホルスタイン牛の頭数不足を補う目的でジャージー牛が導入されました。岡山県では、蒜山地区への導入計画が策定された後、津山地区が追加され、昭和29年に導入が始まりました。

こうして導入されたジャージー牛は、蒜山では残りましたが、津山には定着しませんでした。蒜山では、ジャージー酪農を核とした観光が成立したのに対し、津山でのジャージー酪農は、数ある仕事の一つに過ぎなかったのが要因ということでした。

津山にとってのジャージー牛とは、戦後の苦難を乗り越える術の一つであり、蒜山との大きな違いは、導入のタイミングとその他の産業の存在でした。しかし、結果的に導入は失敗したものの歓迎され、小規模ながらも戦後の津山と人々を支えたと述べて、お話を締めくくられました。

会場にいられた約40名の聴講者は、皆さん熱心に聴き入っていました。

◆今後のごあんない

○第3回 10月13日（土）午後1時30分～3時

講師：作陽音楽短期大学准教授 澤田秀実氏

（自然風土・考古編執筆者）

演題：美作の前期古墳

○第4回 12月15日（土）午後1時30分～3時

講師：岡山県教育庁文化財課参事 横山定氏

（近世編執筆者）

演題：岡山藩主小早川秀秋の時代

津山市史だより 第12号

発行：平成30年8月1日

編集：津山市史編さん室 〒708-0022

岡山県津山市山下92 津山郷土博物館内

TEL：0868-22-5820 FAX：0868-23-9874

Eメール：tsu-haku@tv.tn.ne.jp